

## 続々、今なぜ「CLP」か

「友」地区委員 前岡 志郎

森田・玉ノ井両年度に推進したCLPを、更に強化する杉谷GEの方針は正攻法です。

最初アンテナ情報の形で副ガバナーの設置をRIが発表した時、日本の若手PGが理事会に直接猛烈な反対を起して挫折しました。ガバナー権限は犯すべからずと云うことゝ、ガバナーの質が低下すると云う理由でした。結局DLPという広範な制度内の「ガバナー補佐」で落ち着きました。この補佐は将来権限・経費等で優遇されるでしょうが、今は労多く功少い存在です。ガバナーの時間と労力と経費を縮小して、若い多忙な現役経済人でも勤まるようにしようとのRI理事会の配慮でしたが、日本ではそんなに楽になるのならと年長者が出ると云う逆効果の1面も現れました。それでもRIは会員の減少と、ガバナー不足を補うために必要と判断して、結局全世界の地区に実施を強制適用しました。これはRI唯一の役員である地区ガバナーは、RI本部の方針を遵守する立場にあるからです。

CLPはRIを構成するロータリークラブが対象ですから、簡単に強制できません。

クラブが自由に採択出来る標準クラブ細則の自主性を、各ロータリークラブに指導することで、暫く様子を見るワンクッションになりました。但しこの細則はRI定款・細則とクラブ定款に反することは出来ませんので、これを年月を掛けて規定審議会で変更すればRIがクラブに影響力を強めることは可能です。この点がCLPは先行概念DLPの延長線上にあると云われながら全く同じではない点です。今地区で中心になっている石井昭男研修リーダーが、抜群の努力にも係わらず、RIの方針を強制出来ないが推進せねばならないという、想像以上のジレンマによる苦勞と説得力の困難さがこゝにあるのです。今迄何とか側面から協力したいと思いつつも出番がありませんでしたが、「友」の地区委員という役職を利用して本文を書くことにしました。「友」の地区委員とはガバナーに代って公正な情報を集め、ガバナーに代って一般会員に伝える役目で大変重要な任務なのです。

このCLPはロータリーの奉仕実現の手段に関するメニューの提案ですから、各クラブの自主性を尊重してクラブが考えることで、個人が賛成とか反対とかを云々する問題ではありません。反対なら私共がやったようにRIに直接主張して変更させるべきです。即、地区内の勉強会などで「反対」を称えるのは場違いで地区行事に対する妨害です。まして内容も知らず「僕は反対だから質問されても答えられません」等と強言するような方がいるとすれば、その方は反対する資格さえありません。如何なる質問にも答えられる実力を備えた上での反対でなければ単なる嫌がらせです。石井研修リーダーを堂々と論破出来る智力と実力を示してから批判するのが先決です。本件に関しては杉谷卓紀GEと共に一層地味な努力を期待しますが、私も7月から自由な立場で応援したいと思います。

質と量とは元来二律背反であり不毛の論争です。本音は質も欲しいが量も欲しいのです。

ガバナーの質の低下に直結すると猛反対されたDLPを、自分から積極的に実施されたPGが、CLPは会員の質を下げる等と公言するのは天唾です。100年も昔から私共の偉大なる大先輩が質より量を選んだからロータリーは発展し、貴方も私もロータリアンになれたのです。今ロータリーはRIが目的とする世界平和と、人類の幸福実現の為に、小異を捨て、大局的に多数の同志が必要なのです。「俺は良いがお前は悪い」といった貧弱な質量論議は捨てる時です。それでもどうしても質にこだわりたい方の為に実例を紹介しましょう。その第1はスエーデンの首都ストックホルムロータリークラブです。皇帝グスタフ4世がチャーターメンバーで会員25人が集まりました。その後今尚会員は25名の儘で、それなりの会員しか入会出来ないのです。皇帝逝去のあと職業分類「キング」は未充填のままですと、向笠広次元RI会長に直接教わった話です。もうひとつは私が直接体験したドイツのフランクフルトロータリークラブです。鬱蒼とした門札も表示もない広大な貴族邸の例会場を訪問した際、長老のPGが同じテーブルでこんな話をしてくれました。実はRIから「将来性のある若い会員を入れなさい」と度々要請されますが、「若い人程将来性は不安定なのです。だから私どもはクラブの権威を守るために立派になった方を会員にす

るのです」と、ご老体が仰いました。社会的な肩書きで入会基準を決めているそうです。例えば〇〇大学の学長とか、〇〇銀行の頭取等具体的な規準があり該当したら他クラブから移籍するのです。私に「このクラブの第一印象は高齢者が多いと思いませんか」と聞かれて「ヤア」と答えざるを得ませんでした。世界でも有名な名門クラブの実状です。日本でも例えば大阪RCの平均年齢は70歳を越えています。これらがロータリーが誇る世界の多様性でありクラブの自主性なのです。然し乍ら私共の地区でこんなクラブが可能でしょうか。私共は質量問題を近視眼的に捉えず、ロータリーの大目的を達成するために、少しでも志を同じくする仲間を増やすと考えては如何でしょうか。可能な範囲内で最善の努力を続けるのが本筋です。

それでは良質のロータリアンとは、どんな規準で判断するのでしょうか。

手続要覧の頭に「翻訳の言語に疑義がある場合は英文を以て原文となす」とあります。例えば日本語表現、正会員の原文は「アクティブメンバー」です。単純に云えば質の良い会員の評価基準の第1は行動力のある方ですと断言出来ます。その為クラブやRI組織は常に若返りを必要とします。フランスやイタリーでは英語の「サービス」を「アクション」と翻訳しています。ロータリーにとって若さと行動力は基本なのです。然も全員同じ人頭分担金を払っているのですから新入会員の方々も決して卑下することはありません。経験や年齢を重ねるとどうしても行動力は鈍り、逆に口は達者になります。所謂ベテランロータリアンの評価は自称ではなくて、万人が認める実績と知識論文等が規準になります。同時に長老になれば後輩を育てる努力も大切な任務です。CLPのような新しい制度や若い人事に拒否反応を示す自称ベテランは質が低いのです。私は1996年以降誕生した12名のガバナーの内、私よりも若い7人を単独推薦し、その他殆どのガバナー誕生に深く関与してきましたが、森田年度以降GNの個人的推薦を中止しています。私としてはライフワーク「日本戦前R史」の編纂に集中し、特に「熊本RC初期の歴史」では他に書き手がいないからと容認した奥村勇夫PGの公式発言等から遅れに遅れた「前岡版正史」の完成を強く望んでおり、地区内のことは優秀な若手PGに委かせたいと思ったからです。

日本に於ける質量問題の歴史的経緯と、DLP・CLPについて

1. 1931年(昭和6年)9月19日第70区第1回地区協議会が京都ホテルで開催されましたが、井坂孝ガバナーは①会員の質について②新クラブ設立の必要性について、を議題にしました。正式の記録としての質量問題は日本ではこれが最初と思われます。
2. 1933年(昭和8年)8月26日大阪綿業会館での地区協議会で、村田省蔵ガバナーはロータリーの日本化と、ロータリー拡大の必要性を議題としました。
3. 村田省蔵ガバナーは拡大に積極的であり、全国3万人以上の都市の全てにロータリークラブを創り「以て忠君愛国の拠点たるべし」と月信に発表して大号令をかけました。
4. 1937年度の里見純吉ガバナーは月信にて「質を損せずして量を増やす方法なきや」と心情を吐露しています。余りに質を強調すると自分が身動き出来なくなるからです。以上のように試行錯誤を重ねながら、大局的には拡大路線を踏んで発展してきました。年間に3500円の人頭分担金が払えなくて退会するような発展途上国の会員も含めて、ロータリーの大目的を達成するためには世界中に数多くの同志が必要なのです。

DLPはガバナー業務を極端に軽減する可能性からガバナーの質の低下に直結すると強い反対がありました。然しCLPはクラブ運営上の組織変更ですから、会員の質には直接関係ありません。尚、会員数の少いクラブを対象に発足したCLPですが、今では200人位にも適用出来るよう内容を充実しているそうです。

【お願い】掲載中の論評に関してご意見のある方は、具体的内容の文書で前岡宛にご連絡下さい。ご返事は差し上げます。 FAX 0977-26-1444